

第2回（仮称）仙台市教育構想2026検討委員会議事録

日 時	令和7年7月1日（火） 18:00～19:56
会 場	仙台市役所上杉分庁舎12階 教育局第1会議室
出席委員	野口和人委員長、本囿愛実副委員長、秋山一郎委員、遠藤克宏委員、大曾根学委員、嘉藤明美委員、幾世橋広子委員、越坂由美委員、菅澤美香子委員、菅原弘一委員、堤祐子委員、松田道雄委員、三浦和美委員、若島孔文委員（14名）
欠席委員	なし
事務局	副教育長、教育局次長、次長兼学校教育推進部長、教育人事部長、教育人事部参事、学校教育支援部長、学校教育支援部参事、生涯学習部長、参事兼総務課長
担当課	教育局総務企画部総務課
次 第	1 開会 2 議事 （1）次期構想における理念や施策の方向性の考え方について （2）その他 3 閉会
配付資料	1 （仮称）仙台市教育構想2026において目指す教育の姿について（事務局の考え方） 2 仙台市教育構想2021における取組の状況

1. 開会

2. 議事

○議長（野口委員長。以下「議長」） それでは、ここからの進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

前回確認させていただきましたとおり、本会議は公開となっております。議事録作成のために議事内容を録音しておりますことをご了承いただければと思います。よろしくお願いいたします。

なお、議事録の確認につきましては、議事録署名を委員にお願いしたいと思っております。今回は遠藤克宏委員にお願いしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

では、よろしくお願いいたします。

それでは、次に、本日の会議の進め方についてですけれども、前回の会議では、教育を取り巻く現状の資料を踏まえて、それぞれの分野、お立場から、今後の課題や重視すべき事項などについて様々お話いただきました。その際のご意見も踏まえまして、次の第3回検討委員会におきまして次期教育構想の骨子案を事務局からご提示いただく予定でございます。

本日の会議では、骨子案に記載する理念や施策の方向性について、事務局から現段階における考え方をご説明いただきまして、それに対して委員の皆様からご意見をいただきたいと考えております。またご発言の時間が短くなってしまいますが、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず、資料につきまして事務局よりご説明をお願いいたします。

○事務局（総務課長）

資料1に基づき説明

○議長 ありがとうございます。

ただいまご説明いただきました内容ですとか、あと資料2にございます仙台市教育構想2021における取組の状況、こちらも踏まえつつ、本日は次の2件につきまして皆様からご意見をいただきたいと考えております。1つ目は理念に関する事、もう一つが施策の方針に関する事、それぞれについて委員の皆様のご意見、お考えをお示しいただければと思っております。

先ほども申し上げましたが、限られた時間での議論となりますので、また短い時間になって大変恐縮ですけれども、大体1人3分程度をめどにお話しいただければと考えております。一通り皆様にご発言いただいた後、残り時間の状況にもよりますけれども、改めてもう一度追加でご発言されたい場合には、挙手にてまたご意見をいただければと思っております。よろしいでしょうか。

それでは、秋山委員からよろしくお願いいたします。

○秋山委員

本当に多岐に及ぶので、私がこの中で特に感じたところだけお話しさせていただきます。

教育の理念についての2つ目のこれからの時代の教育の役割の1つ目のポツにある部分を受けて、恐らく②の施策の方針についての四角の1つ目があるのかなと思って読んでおりました。その中で、多様な他者という言葉もあるんですけども、ここの中で読んでいくと、国際的な視点に立った教育が書いてあるところを読んでいくと、それだけでもない部分も大きいかなというところも感じたところで、多様な他者という言葉は、国際的な背景を持つ人々だけじゃなくて、例えばその前の理念のところでも書いてあるように、年齢とか性別とか、そのほか文化とか、そして障害のあるなしとか、あらゆる違いを持つ人々を指しているのだらうなと考えております。そういう意味で、子どもたちが身近にいる多様性のある人たちを認識するということが大事だろうと。例えば同級生の障害がある友達とか、地域の方々とか高齢者の方々とか、あといろいろな家庭環境で育っている友達とか、そんなことも意識しながら関わっていくというのは大事かなと感じました。

ですので、例えば国際的な視点に立った教育のほかにも、障害の有無とか文化とか性別とか年齢などを超えた、多様な他者との積極的な交流と協働の機会を充実させることが求められていると私は感じたところでしたので、もう少しそこまで分かるような形で多様な他者との関わりの範囲を明確に広げてもいいのかなとも感じたところであります。特別支援教育に携わっている者としましても、障害理解とかあと地域社会における様々な人々との協働も含まれることを具体的に示すことで、より多角的といいますか、広く、そして実効性のある構想になっていくということもあるのかなと感じたところです。

○遠藤委員 それでは、まず初めに教育の理念についてです。

「学びの循環」の継承、そして発展というところがかかれていんですけども、少子化、それから高齢化、また人口減少というものが確実に進んでいく中で「学びの循環」というものをどうしていくのかというところは大事ではないかなと思います。現構想の基本方針でも、郷土を愛し絆を深める地域づくり、基本方針の5つ目でございますが、ございます。子どもたちが仙台のまちを選んで将来にわたって住み続けられるようにといったことも視点に入れて、人と人がつながって、そして社会全体で子どもを大切に育てるといったところ、やっぱり大切にされているという経験であるとか、それから安心できる居場所というところが地域への愛着となるのではないかなと思いますので、そういったところを含めての「学びの循環」というところが大切になってくるのかなと考えたところでございます。

それから、これからの時代の教育の役割についてですが、社会の変化が激しい時代というところでは、その激しい変化が止まることのないこれからの時代を生きていく子どもたちです。就労のスタイルも、マルチステージと言われるように、学んで働く、そしてまた次の職を目指して学ぶというところになっていく中で、こちらにもありますように、生涯にわたって自ら学び続ける意欲や習慣を持ち、しなやかに生きる姿勢を持つというところはまさにそうかなと思いますし、こういったところで自らの人生を舵取り

するといえますか、そういったところが大事にあるいはなるというところはそのとおりかなと考えました。

次に、施策の方針についてです。

この5つの要素を加味するということはよいのではないかなと思いますが、私は、もう一つ、教育DXの推進は欠かせないのではないかなと思います。学びの充実であるとか多様なニーズ、それから個に応じた学びの実現を目指すということ、それから、先生方もですね、授業改善とか業務負担の軽減、こういったことをやっぱり推し進めるためには教育DXの推進というのは不可欠だと思います。それによる教育の質の変革という要素も大事ではないかなと考えたところです。

それから、この5つの要素はやっぱり子どもたちや先生方のウェルビーイングの向上を目指す施策につながるといいますので、その視点、ウェルビーイングの向上というものははっきりと打ち出すとよいのではないかなと考えました。

○嘉藤委員

まず1つ目、教育の理念についてですけれども、この「学びの循環」という考え方は素晴らしい考え方だなと思います。前回も同じようなことを発言したような気がしますけれども、社会の変化が加速的に進む中でやっぱり子どもたちに必要なのは、正解を当てる力というよりか、探究する力であったり失敗から学ぶ力、これがとても大切だと思います。そして、自分の学びが社会とどうつながっているかということを実感するという経験がとても大事であると思います。そうしたことから、学校、家庭、地域、企業、そして行政がそれぞれの役割を持って「学びの循環」を共につくっていく、これは非常に重要ではないかなと感じます。やはり教育は未来への投資であると思いますので、人が人を育てる、育て合うというのが当たり前であるという、そんな社会になれば理想だろうと感じます。学びが一人ひとりの中で育って行って、誰かの役に立って、また次の世代へつないでいく、そんな「学びの循環」が根づく社会こそ、これが目指すべき姿ではないかなと思います。

こうした循環型の学びは、まさしく変化の激しい社会、ビジネスの環境でこそとても重要な力になります。自ら考え自ら動き、改善を重ね、学び続ける人材、これは当社の求める人材像なんですけれども、今、多くの企業がこういった人材像を掲げていて、やはり社会へ出てからも、この「学びの循環」、こうした人材を育むことにも直結すると考えています。ですので、教育と企業、それぞれの現場でこの「学びの循環」を共有して連携を深めていくことが地域全体の活力につながるものだと強く思います。

そして、2つ目の施策の方針についてですけれども、この中で3つ目の「豊かな心」「確かな学力」「健やかな体」というところで思ったことを発言させていただきますと、やっぱり「豊かな心」を育むことと「健やかな体」を育成するというのは両立がとても大事だということなので、私は食育というものも非常に重要かなと思います。子どもたちが自分の体と心を大切にして、社会とどうつながって生きていくか、食育は生きる力の土台を育てる、まさに人間形成の根幹であるかなと思います。

一方で、現代は共働き家庭やひとり親世帯の負担が多かったり、同時に忙しいライフ

スタイルの影響で、家庭内で食育を育むというのは非常に難しい状況にあると思います。そうした背景からも、やっぱり学校や地域が食育を担う重要性はこれまで以上に高まっているのではないかなと感じます。この仙台という地域は、農業、漁業が身近で、地場の食材とか郷土料理みたいなものに触れやすい地域でありますので、そういったことを給食だったり授業の中で、やっぱり地域の食文化を通じて、命の大切さであるとか感謝の心とかふるさとの誇り、そんなものを育む機会にこの食育が十分になるのではないかなと思います。

個人的に気になっているのは、仙台を含む宮城県はいつもメタボ率が全国ワーストクラスに入っているんですね。最近宮城のこどももメタボの数値が全国で非常に高いというニュースを見聞きするんですけども、やはりこどもの頃からの習慣形成は未来の健康と直結していることを示す警告ではないかなと、そんなふうに感じておりますので、ぜひ食育を充実させていくということ、これを取り入れていただけたらなと思います。

○幾世橋委員

次期基本理念を考えるときに現在の理念を考えるわけですけども、「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てます」になるんですけども、令和3年からの5年間、やはりこの間、新型コロナウイルス感染症という経験したことの無い状況にあって、また不安定な、今現在もそうなんですけれども、国際情勢の中、少なくとも、私は生涯学習に携わっているわけなんですけれども、私の周りは人生100年といっても100歳に近い人たちが多いわけなんですけれども、その人たちがどういうふうに生き生きと生活をしているかということが、仙台の今までの理念が正しかったのか正しくなかったのかということが表れているのではないかなと思います。私の周りで見ますとみんなすごく楽しく生きているので、大丈夫かなと思っています。

あと、コロナ禍の間でこの理念を私は何回も読み直しました。この「たくましく、しなやかに」という言葉が私は自分に頑張れ頑張れと言われているような感じがしていたので、何回も読み返すことになりました。理念というか、頂いた資料を読みまして、大事なのが、変化に負けない人とのつながりということと、可能性を引き出すことができるかどうかということと、100歳に近いという人たちが学び続ける意欲と生きる力が持てるということがとても大事なことだと思い、今後の5年間にこれを引き継ぐことができたらいいなと思います。

仙台市が推進するダイバーシティという、多様なニーズに応じることへの課題ということがあり、私もいろいろ考えていたんですけども、やはりこの課題に関しては、広がることだけではなく、特徴のあるもの、魅力のあるものをつくっていかなくてはいけない5年になるのではないかなと思います。今までコロナ禍であったり国際状況であったりということ乗り越えてきた私たちであるので、ぜひ今後につなげていくためにはそれをつくってあげればいいなと思います。

学んできたことを地域や子どもたちへ還元できればいいなと私はずっと思っているんですけども、それを引き出すことのできる人材育成が重要になってくると思いますの

で、できるだけ多くの人と接することができるこどもたちでいて大学や企業を巻き込むことができるということで、皆さんに認知してもらえるように、広報していただき、皆さんに伝えていただければいいのかなと思います。

基本的理念並びに施策においては、昨年までの理念を踏まえた上で、次の段階に進める5年間でいけたらいいなと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

○大曾根委員 まず次期構想に関する基本的な理念についてのお話をさせていただきます。

まずもってPTAなんですけれども、私は学び合いと支え合いの組織だと思っています。1人では難しいことも、みんなで力と知恵を持ち寄ってよりよい形を模索していくという積み重ねが、こどもたちの安心・安全、そして豊かな成長を支えるものだと思います。その点で、今回の事務局案で提示された「学びの循環」の理念、すなわち人がまちをつくって、まちが人を育むという考え方を継承するというのはとても深い共感があるなと思っていました。特に、グローバルの時代で、技術革新とかの進展に加えて多様な価値観が共存するという時代がもう訪れていますので、例えば互いに違いを認め合う心とか課題を見いだして自ら学び続ける力というのは必ず必要になってくると思います。これは多分、学校だけではなくて、家庭とか住んでいる地域、これを巻き込んだ「学びの循環」がある、これがこどもたちにとっての安心、そして挑戦、そして、ここからはですね、失敗からも学べるものになると思います。

PTAなんですけれども、私、こどもたちの支援もそうなんです、やっぱり大人の学びも大事な要素だと思っております。社会教育の部分ですね。こうした理念をこどもたちだけじゃなくて保護者とか地域にも浸透させて、いつでもどこでも誰でも学べる環境を整えていくことが重要だと思っています。まち全体で学びを支え合う文化を育てることが次期構想の鍵になると考えています。

次に、施策の方針についてなんですけれども、特に関心があったのが多様なニーズに応じた学びの保障と学びを支える持続可能な体制づくりだと思います。資料2の中にもあるとおり、不登校や発達に特性のあるお子さん、そして外国にルーツのある家庭とか、学校に求められる対応がますます多様化していると感じています。こうしたこどもたちへの支援体制をさらに強化していただいて、誰一人取り残さない、こういった教育を実現するという事は多様な背景を持つ保護者にとっても切実な願いだと思っています。

ただ、教職員の皆さんの負担感も高まっているというのが私は大きな課題だと思っています。先生がこどもたちに向き合う時間をしっかり確保できるように、よく言われていますけれども、働き方改革とか、地域移行で地域の支援体制の整備というのがやっぱり不可欠だと思っています。PTAとしても、コミュニティ・スクールにも代表されまされましても、学校と地域の橋渡しとして貢献できる余地というのが必ずあると感じていますので、今後もそういった関わり方を模索していきたいなと考えております。

○越坂委員

まず、教育の理念について私は2つのワードが気になったところです。

まず、「学びの循環」というところで人づくりとまちづくりというところ、これは本当

に仙台市として続けていってほしいことの一つだなど改めて思いました。「学びの循環」というのはつまり人の循環にもなるのかなと思ひまして、結局、仙台で学んで、人として大きく成長して大人になったときに、またそのまま仙台で生活したいと思える魅力のあるまちであること、そして、仙台で学んで、大人になって暮らしているということは、また仙台のまちをつくる存在となっていくというところで、仙台で学んで仙台に住み続けるという魅力のあるまちづくりというところが非常に大きくなっていくのかなと思ひます。

私は高校で勤務をしていますので、例えば、高校3年生になって他県の大学等に進学しても、地元に戻ってきて働きたいと思える企業が、魅力的な企業がたくさんあるということを感じていないまま過ぎている子どもたちがいるのではないかと、あと、仙台市立には工業高校と商業高校が1つずつありますので、そこを卒業して就職するようになったときに、ここ数年で見られる傾向として、首都圏のほうがお給料が高いというところで、そちらに流れていってしまうというところもここ何年か見られるというところがあります。なので、どうしてもすぐには変えられない現状はあるとは思ひうんですけども、地元の企業と学校とのつながりというところもとても大切になってくるのではないかなと思ひます。スチューデントシティとかファイナンスパークですとかインターンシップとか、いろいろ取り組んでいる施策は今までもあるとは思ひうんですが、やっぱりより早い段階で地元にいるような魅力的な企業がたくさんあるんだというところを、教員もそうですし、やっぱり子どもたちが早く気づくことで、そこから将来的な仕事につなげられるということが必要なのではないかなと思ひました。

それから、多様化という部分です。不登校ですとか学びに課題を持つ生徒、あるいは外国籍の生徒等、多様な背景を持つ児童生徒が今増えているところで、どのように学びに向かわせるのかというところ、また、多様なニーズに応じた学びを展開するための人的な配置がどこまで可能なのかというところを併せて考えなければいけないと思ひます。支援員の配置等、各校で配慮していただいているところですけども、学びの多様化に対応しようとするれば教員の負担感が増します。そこをどのようにうまくバランスを取って対応していけるのかというところも非常に大きな鍵になるのではないかなと思ひました。

それから、施策の方針についてですが、資料にある5つのポイントは本当にどれも必要な要素だと思ひました。市という規模だから一斉に取り組めることというところもあるのではないかな。例えば自分づくり教育はまさにそうだと思うんですけども、そういったところで何か仙台市の柱みたいなのところがあると、今もあるんですけども、そういうところがやっぱり大事だなど思ひました。

前回も少し触れさせていただいたんですが、例えばさいたま市で独自の英語教育を展開していて、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を一貫した独自のプログラムで英語教育に取り組んでいるそうなんです。別に私、英語をやってくださいということではなくて、何かそういった一貫した柱というのがすごくいいのではないかなと思ひていて、5つの要素の中で「豊かな心」「確かな学力」「健やかな体」という表現がありましたけれども、それをバランスよく育てていくというのは、とても理想的ではあるんですけども、なかなか現実では難しいところもあると思うんです。ただ、やっぱり

中でも特に心の成長というのはとても大切なことだと思っております、心が育って豊かになっていけば自然と学びに向かい、自分の健康を意識してというふうに育っていくのではないのかなと私は思っております、なので、何か子どもたち、生徒たちの心の成長を進められるようなものがあつたらいいのではないかなと思っております。

私、定時制高校の勤務が今年で5年目なので、ずっといろんな課題を抱えた生徒たちと接しているんですけども、たまたまご縁があつて、p4cの取組を前任校の仙台工業の定時制と、今勤務している仙台大志高校で1年生の生徒を対象に実施させていただいて、仙台工業のほうでは2回実施しただけだったんですけども、その2回の中でも生徒たちの変容が大きく見られたんですね。不登校で中学校はほとんど通っていないくて、言葉も発しないような生徒たちもいたんですけども、じっくりゆっくり安心して話していいんだよという場を宮城教育大学の先生方につくっていただいとうまくファシリテートしていただいて、自分の思いを一生懸命に話している姿を見たときに、こういう場って本当に学校には大事なんだなというのを今さらながら感じました。仙台大志高校でもつい先日行ったんですけども、やはり生徒たちが笑顔で一生懸命に話している姿があつて、担任の先生方もこんなに話しているの初めて見ましたとびっくりしてました。そういう姿を見たときに、こういう生徒たちが安心して自分の思いを話せる場、そこが学校にあれば学校に足が向くこともできるでしょうし、私たち教員も生徒も安心して取り組める場ということの学校というふうにつながっていくのかなと思いました。

なので、道徳とかロングホームルームとか総合的な探究の時間でという枠で取り組まれている小学校や中学校もあると思うんですけども、多分この方法は、普通の教科の授業の中でも話合いの活動とか意見交換の場とかいろいろな場面で取り組んでいくと、生徒たちの思考の深まりですとか主体的な学びに絶対につながるのではないかなと、私も何回かしか体験していないんですけども、ある意味確信に近いような気がしています。なので、そういった何か柱になるような施策を小学校の早い段階からできると、少しでも今のいろんな学校さんで抱えている課題にちょっとプラスになるところがないかなと思つたところです。

○菅澤委員

教育理念のほうに関しましてはとてもいいなと思つて読んでいました。現在の教育構想第4章の基本理念を読むと、「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てます」とあります。私、小学校勤務なんですけれども、コロナ禍で制約が多い学校生活を子どもたちに強いてしまうようなところでは非常に自分自身苦しかったんですけども、この理念の言葉でとても好きだったのが、「たくましく、しなやかに」というのがすごく響いて、非常に時代にマッチしたなと思つていました。先ほど幾世橋委員もおっしゃっていましたが、窮屈な思いがすごく多かつたんですね。私も学校を運営する上で迷つたり不安とか感じたりしたことがあつたんですけども、その基本理念を読むと暗い足元が照らされたような感じがあつて、とてもよかつたなと思つています。2026のほうにも「しなやかに」という言葉がこれからの時代の教育の役割の真ん中辺りに入っているんですけども、変化の激しい時代で不安

や不満を感じる子どもも多くなるんじゃないかなと思っているので、そのような状況に負けることなく、折れることなくということで、しっかり自己実現してほしいなと思って、何か「たくましく」のような、また別な文言でもいいんですけども、タフにとか自分をしっかり持ってみたいな何か気合が入った言葉が一つ入れば私はいいなと思っていました。

それから、施策の方針については、5点挙げられていて、どれもすごく大事なものだなと思って読んでいました。特に私が非常にエネルギーを費やしているところは、多様なニーズに応じた学びの機会を提供するということです。多様なニーズ、例えば障害のある子とか、外国籍の子とか、家庭環境に問題がある子とか、漠然とした不安を抱えている子とか、非常に敏感な気質を持つ子、ハイリーセンシティブチャイルドとかということで、多様なニーズというのは一昔前よりも多様になっているなと、今改めて考えたらここ一、二年でもう何かぐっと増えたような気がするんですね。画一的な教育ではとてもすくい上げられない、一人ひとりの実態に応じた指導がさらに必要となっているなと感じています。そうするためには、先生たちは、教材の工夫だったり、環境を整備したり、人材を確保したりということで、いろんなエネルギーが必要になってくるなと思っています。これまで以上にそういったものが必要になると思いますので、でも、私たちは必死に、限られたマンパワーの中で本当に毎日いっぱいになりながら、みんな自分の力を最大限発揮できるような教育をしようということで頑張っているところです。なので、この2点目がすごく私はこの中でも一番私にとっては重たいなと考えています。

一方、5つ目の学びを支える持続可能な体制を整えるなんですけれども、これは2つ目の裏返しみたいな感じがして、一生懸命やればやるほど、多様なニーズに対するアンテナが高くなればなるほど教員の負担が増すというか、なかなか限られたマンパワーや時間や設備、場所というところで応じるのが非常に難しいなというのが学校現場の本音です。とても上手にいろんな子たちを一斉指導に取り入れるベテランの先生もいますが、そんな人間ばかりではなく、若い人がたくさん入っている中で、みんな四苦八苦しなからそういった子どもたちをどうやって取り込もうかということで一生懸命やっていますので、教員側のウェルビーイングというか、たくさんいろんなことが書かれてあって、どれもすばらしいなと思うんですけども、果たして私たちできるかなと、最前線に立つ身としては非常に不安というか、若い人に重荷を背負わせるような感覚もあるので、理念を打ち立てながらも、施策の面でも私たちのバックアップをしてくださるような、何か学校現場にゆとりが持てるようなものがないかなと思って考えております。

○菅原委員

教育の理念についてなんですけど、どれもそのとおりだなと読ませていただいていた。なので、特になんですけども、社会変化が急速で激しいことを踏まえて、学び続ける意欲や習慣を重視するといったところに私としてはすごく共感しておりました。そこを考えたときに、方針のほうなんですけど、確かな学力というのをどのように捉えるのかなというのが結構大事になるのではないかなと思っています。これを学習者であるこ

どもの側から考えると、学んだ内容を習得していくということはもちろんなんですけれども、やはり探究的に学ぶとか、それから自分の学びを自ら調整しながら学んでいくといったところが、特に学ぶということの意義を感じながらやっていく、そういう学び方を身につけていくということがこれからすごく大事になってくるのではないのかなと思っています。これを教員の立場から考えると、先生がクラスのみんに一斉に分かりやすく教えるという授業だけではなくて、これまでもやってきていると思うんですけれども、これまで以上に一人ひとりのこどもを大切に、こども自身が探究的に、そして自律的に学んでいくような、そういう授業をつくっていくということが必要になってくるのではないかなと思っています。

そこで、一口に学力とか授業とかというふうに言うんですけれども、授業というときにどういう授業をイメージしているかというのが結構先生方の間でも捉え方がすごく多様です。なので、大切にしたい学力とか授業の捉えが明確に伝わっていくような、それはもしかすると方針のレベルで書くことではないかもしれないんですけれども、そういう考え方の部分が伝わるような表現になっていくといいかなと思っています。

こどもが主体的に学ぶ授業というのを自分も学校教員の時代にいろいろ試行してやってみたんですけれども、結構これがですね、特に保護者の方にはあまり受けがよくなかったりするんですよ。結局、先生が教えなくなってしまったみたいな捉え方をされてしまったりして。なので、やっぱり目指す教育の姿というのを、それがどういうもので、こういう姿を目指しているから学校の授業はこういうふうになっているんだとか、こういうふうに変わっていくんだということを、保護者の方とか地域の方にも明確に伝わって共有されていくということがすごく大事なのではないかなと思っています。

そうした学びを支える持続可能な体制ということをさらに考えたときには、これは自分の関心分野だからというのものもあるんですけれども、もはやデジタル技術の活用は不可欠なものだと思います。それを活用しながら、学び方、授業の在り方がすごく一人ひとりを大切にしたものに移行していったとすると、多分、今よりもネットワークへの負荷とか、今起こっていないいろんなことが情報インフラのほうにも影響してくるということがあるのではないかなと思っています。でも、このネットワーク、通信を安定確保するということは、授業のことだけではなくて、もはや校務という観点から教員の働き方を支える大事なインフラでもあると思いますので、そこは大事だなと思うということがあります。

それと、「学びの循環」ということと関係してくるんですけれども、この「学びの循環」を実現していく基盤としても、これから先はネットワークの活用というのが必須になってくるのではないかなと思っているので、そういったところにも力が入ることが読み取れるようになっているといいかなと思っています。学校だけじゃなくて、やはり家庭、地域、それから様々な立場の人がつながり合って、やはり大事なのはこどもたちが学ぶことの意義を感じられるということではないかなと思っていますので、そういうことを実感しながら一人ひとりの資質や能力を伸ばしていくことができるような教育環境を整えていくという、そういう意思が表れて伝わるような教育構想になっていくといいかなと思っています。

○堤委員

それでは、まず教育の理念についてからですけれども、私はとてもこの「学びの循環」という言葉が好きで、さすが仙台市は市民活動が非常に昔から盛んな都市であるということからも、まさに世代を超えての一人ひとりの学びというのが循環していくことというのはとても大切なことだなと感じております。

その中で、ここの文章にもあるんですけれども、学びを生かして交流ということが次にさらに大事ではないかなと思っております。というのは、もちろん交流することが前提での一人ひとりの学びなのかもしれませんが、循環だけで終わったのではもったいない感があるということと、それから、それこそOECDが出しているラーニング・コンパス2030の中の言葉で「新たな価値」という言葉があるんですね。ですから、私は、交わったり交流するということが、そこから新たな価値まで生み出すということがこれからの教育に求められているものの一つとしてあるのかなと思います。それは言葉の短文で出てくるのは難しいのかもしれないんですけれども、少なくともそういうものも生み出す上での学びの循環的な捉えというものがどこかにはっきり出てくるといいのではないかなというふうに読ませていただきました。

次に、施策の方針についてなんですけれども、3つのところでもってキーワード的に自分なりにこれまでの経験とそれから感想を含めてお話しさせていただきます。

まず、一番最初なんですけれども、これは私は学ぶ必然性ということで捉えていました。まず、例えば防災教育ということを考えて場合に、正直言って、震災からもう14年たってしまいましたので、今、恐らく小学校、中学校で防災教育といってもどこか離れた感じの話があるんですね。少し例えが飛躍するんですけれども、実は先日、ミャンマーで地震があったときにタイのバンコクがものすごく揺れたんだそうです。たまたま知人がバンコクのホテルをアパートとしている人がいて、もうタイ人の右往左往ぶりといったらとんでもないくらいで、タイももちろん揺れてはいるんですけれども、ものすごいパニック状態が起きていると。でも、日本人はいわゆる避難訓練とか地震にも慣れているということで、非常に落ち着いて行動していると。そういうことを現地の人にもこういうときはこうやったらいいんだよと伝えながら、そういう場面があったんだよというお話を伺ったことがありました。

そのときに、ここにある、例えば、今年、仙台市が新しく取り組んでいこうとしている国際的視点ということで、国際探究科みたいなのところですね、例えばなぜ自分たちが防災教育を学ぶのか、誰か伝える相手をはっきりさせるとか、何かそういった形で学ぶことのひとつの必然性みたいなのところを明らかにしていくと、やっぱり学んでいる児童生徒のほうも意欲的に取り組むことができるのではないかなと思いました。それは先ほども少し出てきた英語にも関連すると思うんですけれども、何で英語を学ぶのかといったときに、伝えるものを明確にしていく。やっぱり仙台市はそういう素材があるのではないかなと思いますので、そういったところで学ぶ必然性ということで1番目お話をさせていただきます。

それから、2つ目の多様なニーズというところで、今、日本語指導を必要とする外国人児童に、ボランティアでオンラインで私が1対2とか1対3とかで教えているんですね。非常に楽しいというかユニークというか、この子たち学校でどういうふうやって

いるのかなというお子さんもいたりしてですね。残念だなと思うのは、こういうことがあったと伝える学校さん、私は元教員なのでいざとなればその学校さんと関わることもないわけではないんですけれども、何かそうやって活動している人たちがいて、これは宮城県国際協会とか仙台市の国際協会が主催しているものなんですけれども、あと宮教の高橋亜紀子先生が中心になってやっているんですけれども、関係なくはないと思うんですけれども、何かこういうところも連携ということでね、2つ目のキーワードとして連携ということがもっとがっちりやられていくと、多様性に応じた指導というところも少しはスムーズにつながっていくのではないかなというのは、これは自分の体験から感じているところです。

ですから、先ほど越坂校長先生からも話題に出たんですけれども、実は不登校のセッションのほうにも、対話活動であるp4c（こどもの哲学）でお邪魔させていただいて、我々もスタッフは限りがあるのでそんなにしょっちゅう行けないので、行ったときには学校と必ず連携を取りながら、どういう様子だったかということをお互いが情報交換しながら進めていくということで、生徒さんたちの成長とかそういうところをお互い共有していくということも大切のかなと思いました。ですから、多様なニーズというのは学校だけで抱え込まない、いろいろなところとつなげていく連携というのが大切かなというふうに施策のほうを読ませていただいて感じております。

それから、最後ですけれども、生涯にわたって学び続けられる機会なんですけれども、実は私も30年ぐらい前に社会教育主事で太白区中央市民センターに勤めたこともあったんですけれども、市民センターとかというのは子育て世代とか高齢者の方は非常に熱心に来てくださるんです。ところが、なかなかそのほかの世代を巻き込むというのは難しいなというのは自分自身も経験して感じたことがありました。ただ、もしかすると、先ほど幾世橋委員さんが、何か特徴があって魅力があるというのがキーワードで、恐らくそういう活動をしているグループなり団体さんはあるのかなと思いました。そうなったときに、3つ目のキーワードとしては発掘するというのも大切かなと思います。ですから、社会教育が、自分たちで講座を組むということはもちろんそのときの課題に対しての講座を組むことは大切ですが、いろいろな活動をして、こことここはつなげられるなというところを発掘していくという、そういう視点というのももしかすると有効のかなと感じたところです。

本当に感想的なところなんですけれども、自分の経験なんかも入れながらお話をさせていただきます。

○松田委員

私はこの事務局の考え方のワンペーパーで、教育の理念については非常にすばらしいと思いますし、施策についても本当に一貫しているなと思うんですが、もしこの紙だけをぱっと見たときに、どこの自治体かとなったときに、これはやっぱり仙台だなというふうに仙台らしさが出るようなところが何か具体的な施策に少しでも言葉があって、それがあと具体的に細かいところで事業化というふうになっていければさらにいいのかなと思いました。

といいますのも、具体的にまちづくり、人とまちというところまで理念で書いていますので、仙台のまちは、学都仙台、大学は東北では一番ありますから、小学生、中学生のお子さんが大学や就職などで例えば東京に行って、そちらで家庭を持たれるという方もいる分、仙台の持続的な維持としては、例えば東北のほかの県から仙台の大学や高等機関で学んだ後、そのまま仙台で就職して、結婚してこどもさんを持って、仙台の小学校にこどもが入学したというようなご家庭の方々もたくさんいらっしゃると思うんです。そういった方々の全体の循環というのを考えたときに、まず1つは、高等機関、学ぶ機関がたくさんあると、専門学校も含めてなんですけれども、興味関心があるこどもさんがあるときに、大学の専門的なこととかいろいろな職業の学びとかというのを通常の学校教育の枠を超えてでも学べるような、それで個性を伸ばせるような、「学びの循環」というよりも学びの往還的なことで、本当に仙台に住んで自分の個性を伸ばすことができたというような、そういった仕組みなんかもあったらいいのかなと思いました。

あともう一つが、どうしても、普通の自治体ですと学校教育と生涯学習というのがあって、一般的な生涯学習のイメージが、市民センター、公民館的なところであれば中高年のご退職された方々が日中学ばれるというイメージが非常に強いんですが、仙台の特徴としての若者がたくさんいるということをつまれば、ここの5つの中の生涯にわたって学び続けられるということのもう一つのワンクッションとして、若者文化とかそういったのも大切に育てていくといいますか、そういったのがあればいいのかなとも思うんです。若者たちが憧れるようなエリアとかなんとかというような、そういったのは東京のほうにどうしても行きがちだし、人口のボリュームからするとそうでしょうが、意図的に産官学一体でとにかく若者を主役にして、自分たちがここのストリート、エリアで自分たちが楽しいというようなのを育てていくというのも、それも一つの学習としてやっていくというような、そういった取組なんかがもっと前面に出ても、仙台らしさ、どうしても文化とか郷土というふうにすると、これもまた一般的なイメージで戦国とか江戸とか特定のイメージが定着し過ぎているので、そういったカルチャーとか若者文化というのを育てていくというのも一つ学習としても大いにあってもいいのではないかなと思いました。

○三浦委員 教育の理念については、この「学びの循環」という言葉をやはり学校でも、それから仙台市全体でも大切にしていくという、そういう循環的な考え方、これがとても大事なのではないかなと思いました。

それから、施策の方針について、「本市の特色を生かしながら」という文章があるんですが、じゃあ本市の特色とは何かということにはちょっとはっきりしていないかなというところを感じたので、先ほど松田先生からお話があったような、仙台市らしさというのを端的に、仙台市とはこういう特色のある市ですということを前置きにしていただくと、そこを生かしながらやっていくんだなというのが伝わるのかなというようなことを考えましたので、ご検討いただければありがたいなと思いました。

それから、生涯にわたって学び続けられる機会を充実させるということで、今、寿命も非常に延びておりますし、本当に90代ぐらいの方々もとても元気で学んでいらっしゃる

るというのも私も間近で見たりすることがありますので、要するに、学校教育の充実とあと学校教育を終えた後の学びというところを連携させて充実させていくというのがとても大事だなと思います。そのときに、大学が非常に多い地域なので、今、いずれの大学でもやはり市民向けの講座とかいろんなセミナーとかというのは新聞とかを拝見するとよく出ているので、この大学でもやっていらっしゃるなどというのはすごく感じる人が多いんですね。本学でも東口にキャンパスを持っておりまして、そこで実は、私たち学科の有志のメンバーで土曜セミナーというイベントというかセミナーを開催する予定で、実は仙台市教育委員会様のご後援もいただいております、やらせていただくことになっております。今、せっかくある大学という大きな資源をどうやってこの学びにつなげていくかというのも、これから大学が社会貢献の一つとして取り組んでいかなければいけない大事な要素かなと思いますので、その辺も委員会と大学との連携というのが取れていくととてもすばらしい内容になっていくのではないかなと思いました。それから、本学も東口キャンパスとか、ほかの大学さんもいろんなサテライトとかを持っていらっしゃる大学さんもあるので、そういうところのどういうところで何ができるかみたいな、そういうのも一緒に検討していければ大変いいかなと思います。

あとは、学校現場の現状は、ここ数日のいろんな報道でもかなり大変な状況になっているなと思っております、私も以前、小学校の教員だったので、教員自体が意欲を持って、熱意を持って、授業から、それから教育活動に取り組めるという、そういうところの体制の構築というか、それをかなりきちんとやっていかないと、先生方にいろんな負担がかなりかかり過ぎているし、またそれによるストレスなんかも出てくるのかなと思いますので、こういうところでも私たち大学の教員としてご協力できる場所があればやらせていただければなと思う部分がありますので、その辺についても、大きな意味での仙台市内にあるいろんな教育施設とか大学とかをどのように活用していくかというところにポイントも当てていただいて施策を進めていただければ、大変ありがたいと思います。

○若島委員 これからの時代の教育の役割で2つ目のところに「生涯にわたって自ら学び続ける意欲や習慣を持ち」と、こういうことはすごくいいなと思います。そして、下のほうに、施策の方針についての2つ目で「多様なニーズに応じた」とありますけれども、恐らくこの文章の中に入っていることなんだと思うんですけども、病気になったり、それこそ災害に遭ったりとか、不登校になったりとか、そういうことがあっても、どんな状況やタイミングでも復活できるというか、社会に対してでもそうだし学校においてもそうだし、まずそういうことがこの「多様なニーズに応じた学びの機会を提供する」の下に3行に含まれているのであればいいんですけども、そういうのがすごい大切だろうなとまず1つは思いました。

あとは、先ほども自ら学ぶとか自律的に学ぶとかという言葉も出ましたけれども、大人はいいなと思うんですよ。大人の学びというコミュニティ・スクールもそうだしセミナーとかもそうだと思うんですけども、子どもたちは、教科学習に引っかけたら、そこで学ぶのが嫌になってしまう。本当は学ぶ意欲がなかったりとかそういうわけでは多分ないんですけども、教科学習でいろんな問題があって引っかけ、そうしたらや

やっぱり学びが難しくなると思うんですね。そんな中で下のほうを見ていったら、コミュニティ・スクールみたいな、こことの連携とか、こういうことが書いてあって、多分、教科学習で引っかかる、例えば算数・数学が分からないこどもさんでも、例えば大学みたいなところでやっているセミナーとかを聞いたら、これおもしろいと思うこともあるのではないかなと思うんです。そういうことが、一番下に「協働し」と書いてあるので、これいいなと、そういう意味なのかどうか分かりませんが、私が言ったようなことがもしこの中に含まれているんだったらいいなと思って聞いていました。

不登校のこどもさんとか、ひきこもりと言ったほうがいいですかね。もっと年齢が上がったときにまた復活しようとするときに、もう一度やっぱり勉強しようと思って、でもずっと勉強していないから、勉強しようと思っても諦めて、これを繰り返してもう嫌になっちゃって。でも、多分それ知らなくても、例えば、大学で私働いていますけれども、大学でも大体、漢字とかは別ですけども、数学とかは掛け算とかができれば大体8割ぐらいは仕事ができるんじゃないかと。大体そうなんじゃないかなと思うんですけども、そんなので引っかかってひきこもったりとか、不登校になったりとか、おもしろくないとか。学ぶというのは別にそれだけじゃないのに、そういうところに引っかかってしまってというのはすごいもったいないなと思います。

というのも、私自身は、今、能登半島地震とかありますけれども、輪島というところの出身で、そして塗師屋なんですよ、家が。そしたら全然関係ないですよ、もう。一生懸命蒔絵することができれば、それでみんな褒められるし評価もされるという、そういうところで。漁師たちもそうです。今は分かりませんが、私ぐらいのときだと、中学生になったら、離れた島まで行ってそこでアワビを獲ったり、それを手伝いに行くわけです。そうしたら中学校の先生が怒るわけですよ、不登校ですから。でも、親からすると、どうせ漁師になるんだし、親の手伝いをしているいい子じゃないかと。そういうところを見てきたので、こどもたちのことと言うと、教科学習に限らず、学ぶということは限らないので、そういうことがこういうところに入ってきたらすごいいいな、入っているんだと思うんですけども、いいなと思います。

長くなってすみませんが、もう1点。この「健やかな体」と。体のことはすごく大切だと思うんですけども、これも、例えば学校でいうと体育というのがあったり部活動というのがあったりしますけれども、やっぱり本人が今できないことができるというこの変化、これがやっぱり評価されるような、そういうものじゃないと、運動神経がいい人が活躍して、体力のある人が活躍して、それが教育としていいのかと思いますね。やっぱり、例えば体力がない子でも、今これしかできない、これがこうできたらすごい変化ですね。そこに組み組んだら評価が5になると。部活が5段階か知りませんが、大学だったらAAがつくみたいな、やっぱり体のことにしてもそういうことがすごい必要なんじゃないかなと思って見ていました。

○本図副委員長 皆様お疲れのところすみません。手短に申し上げたいと思います。

1点目の理念なんですけれども、皆様は様々なご経験からとてもいいとおっしゃったんですけども、ちょっと申し上げにくいんですけども、私は実は、この述語が「育てます」なので、社会教育の領域で見たら、例えば高齢者が見たら、育てると、じゃあ

自分は入らないと思ってしまうのかなと、どうなんだろうと。「学びの循環」というところは今回の説明で意味も分かり、まちが教育資源というのもとてもいいなと思うので、いいのかなと思っていたんですけども、幾世橋委員がとてもいいとおっしゃったのでくじけてしまうんですが、ただ、やっぱりこれを見たときに、社会教育も福祉も学校教育もやっぱり良さが需要だよねというものであるような気がするので、育てるでいいのかなという気はしておりました。

また、これも皆さんがそういう点ではとてもいいとおっしゃるんですけども、まだたたき台をつくっていくところなので、ちょっと異なる意見を申し上げたいんですが、基本方針のⅠからⅥが、つけていただいています点検評価とかを読むと施策の領域なんだなというのがようやく分かるんですけども、ただ、このペーパーだけを見たときに、ⅠからⅢの領域の違いとか、ようやくⅤになってここは社会教育の領域かなという感じはするんですけども、そしてⅥが大型の設備が要るところかなという感じなんですけど、だったら、もうⅠからそれぞれがどういう領域でここを重点的にやっていかなければいけないからだというふうになっていたほうがすっきりするのではないかということをやちょっと思ったりもしました。こだわらねないんですけども、市民から見て、何よりですね、先ほどからもご意見があるんですけども、私としてはやっぱり、教職員の先生方が見たときに、こういうふうに充実してくれる、自分たちに期待してくれているんだったら仙台市で働きたいと、そういうメッセージになる領域だといいなと思っておまして、ⅠからⅥまでがほわっとしていると、何かもうたくさんあって自分には無理と思ってしまうんじゃないかという気がいたしました。そんな点で、基本理念と方針がどの対象で誰に向けて言っているのか、どの領域なのかというのがもう少し構造化されてもいいのではないかなという意見です。

基本理念のところは、皆様は、しなやかに自立、たくましいというのがすごくいいとおっしゃるんですけども、私はちょっと異論になりますけれども、文科省の教育振興基本計画で自立とか創造性と言ったのが1期とか2期のときで、今、また違うステージのことを言っているように思うので、しなやかにというのは実は、私がおります宮教大の附属小が、多分30年来ずっと「しなやかに」と学校教育目標を掲げておられて、使ってもらうのは、とても大事な言葉なのでいいなとは思うんですけども、今は、自分の幸福と他人の幸福と社会の幸福を求めているような、そういう力が言われているのではないかなという気がして、いろんなところで使われているのもう皆様も飽き飽きかなと思ったんですけども、遠藤先生が言ってくださっていたので、私も、ウェルビーイングにつながるような、自分も幸せだけけど社会も他人も幸せというような、そして、今回頂きました資料1の中では、協働とか自他への思いやりとかそういう言葉はたくさん入っていて、本当にそのとおりなので、もし施策のところでは個人を大事にするという方針を言ってもらえるのなら、基本理念のところはもっと、社会の形成者だとか有為な人材とか、自分個人としては、改正前の学校教育法の高校の目標に有為な社会形成者をつくるみたいな文言がありまして、そういう社会をつくっていくような人たちで、自分だけがよければいいのではなく、みんなと力を合わせることができる、そういう力ということが頭にあった上で、施策のところでは個人を大事にしていく、個人の力ということでも、先ほど申し上げました構造化というのはそういうことで、そんなふうに、いじめ関係で私ここ

に呼んでいただいていると思っっているんですが、いじめを防止していくということも、結局、自分がこのコミュニティーだとか学級だとか学校とかの一員で形成者なんだという意識がなければ、やっぱり他者を攻撃したり思いやりのない行動をすると思っっておりまして、それは本当に先生方が日夜、コミュニティーをどういうふうにつくっていく力を育成するのとかどもたちになさっていると思っんですが、ただ、コロナ期なんかは大人のほうもヒステリックで、他者を思いやるということがやっぱりできなかつたんじゃないかなというのもありまして、そういう社会をみんなで作っていくというような点が大人もこどももというふうになればいいなというところが理念のところでございました。異論を申し上げまして大変失礼します。でも、全体としてはまた、長きに巻かれるという人生ですので、こだわりませんので、今回はちょっと異論を述べさせていただきますと思っます。

全体の施策のほうとしては、やはり繰り返しになるんですけども、とにかくこの基本方針の具体的な施策を、学生たちは教員採用試験に向けて必ずこれを見て勉強するんですね。勉強と言うとよくないんですけども、見ますので、学生たちが見ても、ああここの仙台市で働きたいというふうに学生に伝わるような、つまり若手の教員に伝わる、勇気もらえるような、そういう一連のものであってほしいなというところになります。

○議長 どうもありがとうございました。

私のほうからも少しばかり話をさせていただこうかと思っます。前回、こどもたちというか、学校の中では皆と同じことを求めるというか、皆と同じようにということがすごく大事にされるというか、こどもたち自身、大人もそうだと思っんですが、何となくそういう方向で動いているという話をさせていただいたかと思っます。そこから外れてしまうということがなかなか許容されないというか、そういった状況にあるのではないかという話をさせていただいたかと思っんですが、それを、その幅を、狭い幅の中で同じということを考えるのではなくて、その幅を広げていけたらいいなという話を前回させていただきました。これはまさに多様性という話で、多様性の尊重、ダイバーシティということになるわけですが、そういった方向をぜひ進めていただきたいということを考えています。多様性の尊重、これをぜひこどもたち自身が、これは大人も含めてですが、身につけていけるような、そういった形のものになっていくといいなと考えています。

今、ダイバーシティ絡みで言うと、DEIということが言われます。DEIは何かというと、ダイバーシティとエクイティとインクルージョンです。多様性と公正、あとは包摂ですね、インクルージョン、インクルーシブ。これらというのは社会をつくり上げていく上での基本となるもので、そういったものを例えば仙台に住むこどもたちが、大人も含めてですが、理解していく、尊重していくということが大事になっていくのではないかなと思っます。

ちなみに、例えば合理的配慮の提供というものが、今、民間事業所も義務となりましたけれども、合理的配慮とは何かというと、セイムネスの提供ではないんですね。セイムネスというのは同じもの、それを提供するというのではなくて、フェアネスなわ

けです。公正という、何かを例えば達成するために必要なものは一人ひとり違うわけで、同じものを提供して、それが例えば平等だとか、これでみんな同じなんだからということではなくて、一人ひとりに応じたものを提供していく。そういったことを世の中の人々がきちんと理解していくということが、例えば子どもたち一人ひとりに応じた学び、あるいはいろんな経験を持った人たちがいろんな形の学びをしたいといったときにいろんな形のものを提供する、それに対してそれは当たり前だよねとなっていくということが多分大事なのではないかなと思います。ですので、ぜひそういったことをどこかで、DEIという言葉を入れるかどうかは別としても、考え方としては入れてほしいなと思っています。

じゃあそれを具体的に進めていくときに、例えばどんなことをやっていくのが方法としてはあるかというのを考えると、実は最近、文科省は共創という言葉をよく使うんですね。共に創るの共創なんですけど、これはなかなか大変なこともあって、実はうちの大学の食堂が老朽化しまして、雨漏りがするという大変な状況になっていたんですけども、それを改修したいというので国に相談したときにどんなことを言われたかという、食堂も共創の場にとのことでした。要するに、単に食事をするという場ではなくて、例えば地域の人たちだったり、いろんな人たちがそこに関わってきて、そこで何かを創り出していく場にきなさいと。そういう構想がなければ認めませんと言うんですね。いやそんなこと言っても、学生にとっては食べるの大事でしょと思うので、そんなこと言わずに認めてほしいと思ったんですが。でも、実は共創はとても大事だと思っていて、例えば、学校の話でいえば、学校の場というのは子どもたちと先生が共創して何かを共に作り上げていく場ですね。子どもたち同士で作り上げていく場だし、そこに例えば地域の人たちが入って作り上げていく場だし、先ほどの話だったら例えば企業の方も入ってとか、そういった場をあちこちにつくり上げていくんだと、共創の場をつくり上げていくんだというような考え方をしていくと、もしかしたらDEIということにもつながっていくのかなと思います。

あとは、これも委員の皆様からいろいろお話が出ていると思いますが、1つ気になっているのは、仙台の子どもたちの例えば誇れるところはどこか、すばらしいところはどこか、仙台の例えば先生方のすばらしいところはどこか、誇れるところはどこか、そういったものが何か少し表に出てくるような、そういったものがあるといいなと思うんですね。先ほど副委員長から、ぜひここで先生やりたいとか、子どもたちにとってもここがいいなと思えるような、仙台っていいなと思えるような、そんな構想になるといいなと思うんです。ただ、もちろんこれをつくる上での制約があると思うので、なかなか難しいところはあるかもしれないんですけども、やっぱり仙台っていいよねと、ぜひ行きたいよね、ここでこういうところで勉強したいよね、学びたいよねというものにぜひしていけるといいなと個人的には思っているところです。

ちょっと私もいろいろと言ってしまいましたが、一通りお話をいただいたので、もし例えば皆様のお話を聞いて少し付け加えたいとかさらにこういうことを申し述べたいということがあれば、挙手をしていただいとお話しいただければと思いますけれども、いかがでしょうか。

○幾世橋委員 この「人がまちをつくり、まちが人を育む学びの循環のもと、たくましく、しなやかに自立する人を育てます」ということは、私にとっては今年までの理念です。来年度からは違う理念でいけばいいなと私は正直思っています。少しこれ長いなと思っていて、何かいろんなことがついちゃって、「人がまちをつくり、まちが人を育む」で1個で、「学びの循環」が1つで、「たくましく、しなやか」で1つで、「自立する」という、少しつき過ぎたかなというのを感じているので、もっと分かりやすくできればいいなと思います。

あと、先ほど言っていた6つの基本方針なんですけれども、基本方針Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに関しては学校教育というふうに最後に締めくくっているの、学校の先生方のあれかなと、学校のとうか子どもたちに向けての方針かなと思っていて、私はⅣ・Ⅴ・Ⅵに関しては、全体的なものとうか、私は生涯学習に関わっているんですけれども、生涯学習に関するもの、それからその方針というふうに受け止めています。Ⅵに関しては、学びを支える教育環境整備なので、市民センターであったりあと学校のトイレであったりとか、そういったものをどうやって持っていくかというふうにイメージしているんですが、それで分かるかなと思っていたんですけれども、いかがでしょうか。

○議長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。では、三浦委員、お願いいたします。

○三浦委員 資料2のこともお話しさせていただいて大丈夫ですか。これをやっぱり読んだときに、私も実はこれは一体誰が読むのかなというのをちょっと感じまして、先生方が読むとしたら、熟読するのにかなり時間かかるし、あと、自分が例えば教員として実践するとしたら、ここを頑張ってみようと思えるところを見つけるのが大分大変そうだなというのは感じたんですね。新しく教員に採用していただく人とか、それから長年やっていたらっしゃる先生も、この教育構想の下で教育活動を実践するとしたら、やっぱりもっと分かりやすく、あと、何というんですかね、読んで負担感のない分量というのがあるんじゃないかなと思って。私なんかはすごくこだわりがあるところがあって、例えば、基本方針Ⅰ、次の基本方針Ⅱというのが、3ページのところが真ん中から始まっていて、そういうのにすごく違和感を感じてしまうタイプなんですね。できれば、Ⅰ、1と始まって、2ページなり3ページ使ったとしたら、Ⅱはここから、ピッと上から始まるみたいな、そういう分かりやすさというのはすごく大事かなと思うので、方針が6つあるとしたら、例えば1つの方針で2ページで、12ページぐらいの削減とかも努力できると、より分かりやすく、そして、ここで頑張ってみようとかこれを頑張ってみようというふうな意欲とうか行動が喚起できるかなというところを感じておりますので、レイアウト的なものですね、内容を若干精査しつつ、そういうところを目指していくといいのかなということを感じました。

○議長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○嘉藤委員 先生方のお話を聞いて非常に学びの多い時間だなと感じているんですけども、子どもたちが学校教育の中で生まれたその先は社会に出るわけで、社会人、企業人になっていくわけで、その先の人生のほうが明らかに長い人生を歩いていくんですけども、学ぶことの意義とは何だろうとかそういうお話も、今度は社会に出ると働くことの意義とは何だろうという、そんなことを自問自答しながら、自分なりの豊かな人生をどう、自分だけではない、周りの人の豊かな人生のために何ができるかみたいなことで生きていくのかなと思うんですけども、企業側からいうと、学生を終えた若者が、社会に、企業に入ってきたとしたら、またそこで一から社員教育をするんですよ。これ、企業が教育の場なのかと時々思うことがあって、やっぱり学んだことを生かすことが社会の場であるのかなと思うと、またゼロから、一から、挨拶から、社会とはということに教育をするんですよ。そこに企業がすごくやはり、人材不足だったりするので教育にお金と時間をかけていくんですよ。何かもったいないなと思っていて、教育は大学とかで終わりではなくて、その後続いていくんだという考え方を教育構想の中に取り入れるということができないのかなと、今皆さんのお話を聞いてすごく感じたんですけども、教育は教えるだけと書きますけれども、やっぱり社会に出ても学び続ける、教え合う、育むということが多分続くとする、キョウイクって、共に育てるという、そういった共育がまずこの「学びの循環」という考えの中で自分の中ではマッチしたんですけども、そんなことを思いましたという話です。

○議長 ありがとうございます。ちなみに、共育、共に育つ、育てるだけじゃなくて育つとすると、先ほどの本図先生の育てるだけじゃなくて自分たちも育つという話になるかと思えますけれども。ほかにいかがでしょうか。

○堤委員 先ほど、学生さんがこれを、面接試験対策か何か分からないですけども、読んだときにおっと思うということの理由の一つに、やっぱり学校教育のところあまりに詰め込み過ぎていて、じゃあそれって私がやらなきゃいけないの感が強いというんですかね。ですから、繰り返しになるのかもしれないんですけども、例えば連携とかつながりとか、何かそういう一緒にやれるものがあるんじゃないのかなというところを、これを施策に具体化して出すかどうかはまたあれなんですけれども、何かそんな余裕みたいなものがあって、今改めて2021を読んだときに、こういうときはこういうところとも協力しながらやれるのかなみたいな情報があると少しほっとするのかなというのを、思いつきですけども、そんな感想を持ちました。

○議長 ありがとうございます。ほかにございますか。もちろん複数回発言されても構いませんので。

○菅原委員 この教育構想はこの本体のみで、これをもう少し簡易にしたリーフレットのなものとかも作られるんですか。

○議長 いわゆる概要版的なものですよね。

○菅原委員 はい。

○議長 では事務局からお願いします。

○事務局（総務課長） 概要版のような、もう少し簡易なものは作る予定でございます。

○菅原委員 分かりました。この教育構想にはやっぱりどうしても盛り込まなければいけないものというのが多分たくさんあるので、一般に分かりやすいというところでいうと、概要版があるのであればそういうところで実現してもいいのかなと思いました。さっき、企業に大学とか高校を出て就職したらまたそこで教育が始まるという話があって、そういうお話は、たくましく生きる力育成プログラムを作成したときに、検討委員の方が同じことをおっしゃっていて、だから、そういうふうにならないようにやっぱり学校教育の間からやれることはあるんじゃないかみたいなこともあってつくられたのが、今、自分づくり教育の中でやっている、たくましく生きる力育成プログラムというのがあって。だから、そういった同じような課題意識が何回も繰り返し繰り返し出てくるようなところがあるので、今までやってきたものの中でやっぱり大事にすべきものとか、そういう思いで始まったんだけど、何となくちょっと沈んできているようなものがあれば、それを見直してもう1回、やっぱりそれは結構仙台の教育の中では特徴的なものだったんじゃないのかなと思うので、そういうのを見直すというのも大事かなとお話を聞きながら思いました。

○議長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

－質問・意見なし－

それでは、そろそろ終了のお時間が近づいてまいりましたので、委員の皆様のお話を聞いた上でまた改めて何かこの後こういうことも言いたいですということがあれば、事務局宛てにご連絡いただければと思います。その手続については、また事務局のほうからご説明いただければと思いますけれども。

議事の1つ目は以上としたいと思いますが、よろしいですか。

－全員了承－

では、本当に様々なご意見をいただきまして、どうもありがとうございました。

議事の（2）その他になりますが、その他につきましては特に用意はしてございません。ですので、全体を通して、これまでのところで何かご質問等ございましたらご発言

いただければと思いますけれども、お気づきの点等でも構いませんが、何かございましたらお願いします。
よろしいですか。

－質問・意見なし－

それでは、本日の議事はこれで終了としたいと思いますので、事務局に進行をお返ししたいと思います。よろしくお願いします。

3. 閉会